「神の愛が全うされる」　　ヨハネの手紙第一　２：１～７

**序論：確認**

ヨハネの手紙第一を取り上げて、今回で 3 回目になります。

すでによく知っている方も多いと思いますが、今朝は、基本的なことも確認しておきましょう。ヨハネの手紙というのは、ヨハネが書いた手紙ということですね。このヨハネという人物は、イエス・キリストの弟子です。弟子たちの中でも、特にイエス様に近かった 12 弟子の一人であるとされています。そのヨハネが、同じ信仰を持つ仲間たちが集まるいろいろな教会に向けて書いたのが、このヨハネの手紙です。

**序論：①キリストとの交わり**

ヨハネは、この手紙はじめのほうで、自分たちが見たこと、聞いたことを伝えるのだと言っていました。自分が見たもの、聞いたもの、じっと見つめて、手で触ったものについて、手紙に書いて送ることが、「私たちの喜びを満ちあふれさせる」ことになる、だからこの手紙を書いて、それらを伝えるのだとヨハネは言っていました。

そこまでヨハネが言っているもの、すなわち彼が目で見て、耳で聞き、さわったものとは、いったい何だったでしょうか。それは、イエス・キリストであると彼は言っています。12 弟子の一人であったヨハネは、イエス様と寝食を共にし、イエス様がなされることをその目で見て、イエス様がお語りになった言葉を聞いていました。時には、イエス様を通してなされた本当に不思議な奇跡の業を目の当たりにすることもありました。しかしヨハネが伝えたかったのは、そういう不思議な出来事ではなく、イエス様ご自身のことでした。イエス様がどのようなお方であるかということを、彼は伝えたかったのです。

なぜヨハネは奇跡的な出来事ではなく、イエス様のことを伝えたいと思っていたのでしょうか。奇跡のような分かり易い話題性のある出来事の方が、人の目を集めるには良かったのではないでしょうか。でもヨハネが伝えたかったのは、イエス様がどのようなお方であるかということでした。それはヨハネが、イエス様との交わりの中に大きな喜びを見いだしていたからです。ただの喜びではありません。勇気づけられ、励まされ、胸を熱くされ、生きることが楽しくなるような、それによって自分の人生に新しいいのちを与えられるかのような、輝くような喜びです。イエス様を信じる時に、クリスチャンにも与えられる喜びですね。

ヨハネはその喜びを「永遠のいのち」と呼びました。自分に力を与え、喜びを与える、尽きることがない喜びがイエス・キリストとの交わりの中にあり、神様との交わりの中にあることを、ヨハネは見出したのです。

**序論：私たちの抱えている問題**

人は、この永遠のいのちを神さまからいただくまで、本当の安らぎや平安を得ることができません。心や体だけはなく、霊的に満たされて安心を得るのは、私たちにいのちを与えることができる、唯一の真の神様のもとにおいてだけであるということが、聖書が語っていることです。

私たちの人生には様々な必要があります。生きていくために飲んだり食べたりするものが必要ですし、衣服や住居も必要でしょう。それらを手に入れるためのお金も必要です。また、そのように目に見えるものだけでなく、生甲斐や楽しみといった目に見えない必要もあります。誰かから愛されることを求めている人もいるかもしれません。人生で成功し何かを成し遂げたいと願って、それを励みにしている方もおられるかもしれません。私たちは単にこの身体が生きていればいいというのではなく、精神的にも豊かにされて満たされていなければ幸せを感じることができません。

ですから私たちはそれらを求めて行動します。それらを手に入れることができれば、満たされるだろう

と考えるからです。しかし、そういったものが私たちの心を本当に満たすということはありません。仮にそれらによって満たされたとしても一時的なことであって、私たちが真に満たされることはありません。私たちの本当の問題が、そこにあるわけではないからです。

私たちが抱えている本当の問題とは何でしょうか。私が今日、ヨハネとともにみなさんにお伝えしたいのは、まさにこのことです。私たちが抱えている真の問題、それは私たちにいのちを与えることのできる唯一のお方である神から離れていること、神なしで生きていることです。聖書はこれを、「罪」と呼んでいます。神様は、私たち人間を祝福し、神様のともに生きる存在としてお造りになられました。神様から愛を受け、神を愛して歩むこと、それが人間が造られた本来の目的です。その目的を見失って、神様以外の物を求めて、私たちのことを本当に愛していてくださっている神様を無視して生きること、それが聖書の言う「罪」の本質であります。

「罪」は私たちから多くのものを奪います。まず、神様から愛されているということを分からなくさせ、神様が素晴らしいお方であるということを分からなくさせます。神様を見失った私たちは、人生の中で漠然とした不安を感じたり、理由も分からない怒りを覚えたりするかもしれません。

この問題に対する解決はどこにあるのでしょうか。それは、神様のもとに帰ることでしか得られません。ヨハネは、「永遠のいのち」と表現したイエス・キリストとの交わり、神様との交わりに喜びを見いだしました。ここに解決があるのです。「交わり」というのは、クリスチャンが良く使う言葉で、「交流」と同じような意味のことばですが、単に同じ時間を共有したり、楽しい時間を過ごすこと以上に、お互いのことをよく知り、互いに愛し合う関係のことをいいます。クリスチャンの交わりは、愛の交わりであり、互いに愛し合うべきであること、これが、ヨハネがこの手紙で強調し、私たちに伝えようとしていることです。神様を愛し、神様に愛されていることを実感しながら生きること、それがどれほど私たち自身を変え、私たちの人生に豊かな実を結ばせるのか、そのことをぜひ知っていただきたい。も一度思い出していただきたいと思うのです

## 本論①　罪を犯さないようになるために

*今朝の箇所、2 章 1 節をお読みします。「1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。」*

ヨハネはここで「罪を犯さないようになる」ようにと勧めています。「罪を犯さないようになりなさい」とに勧められたとき、みなさんはどのように感じるでしょうか。それにどう反応するかは、その人が「罪」についてどのように考えているかによります。人間は、自分が正しいと思うことをします。自分なりの規準をもって判断し、生きています。だから人によっては、自分は罪なんか犯していないというかもしれません。

聖書にも、自分は罪を犯さないように生きていていると考えている人々が登場します。代表的なのはパリサイ人と呼ばれる人です。イエス様は、このパリサイ人をたとえ話（ルカ 18 章）に登場させたことがありました。そのたとえ話しは、自分は正しいと確信していて、他の人々を見下している人たちを教えるために語られたものです。

あるとき、二人の人が神殿に祈りを献げに行きました。一人はパリサイ人で、もう一人は当時罪人の代表のように考えられていた取税人でした。その時にパリサイ人が心の中でこんな祈りをしました。「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取るもの、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから十分の一を献げております。」このパリサイ人は、自分の規準で考え、自分はそれなりにやっていると考えていました。自分が罪を犯しているとは、少しも思っていません。

一方、取税人は遠く離れて、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて「神様、罪人の私をあわれんでください」と祈りました。彼は自分の罪を痛いほど自覚していたのです。イエス様はこの取税人の方の祈りが神様に受け容れられたと教えています。

罪の規準は私たち人間の側にありません。何が罪であり、何が罪でないかを正しくさばくことができるのは神様であり、その基準は神様の側にあります。

最初に、聖書の言う「罪」の本質は、神様から離れていることだと申し上げました。イエス様のたとえ話に出てきたパリサイ人は、自分では神様に仕えていて、神様に祈っているつもりでしたが、実際には彼の関心は自分の行いや自分の正しさに向けられていました。パリサイ人は、「神よ」と呼びかけて祈り始めましたが、彼の考えの中には神様を求める子ことはありませんでした。

**本論②　罪を犯さないようになるために**

今度は、逆に「罪」の現実を知っている、私たちクリスチャンはどうでしょうか。クリスチャンであれば、聖書が「すべての人は罪人である」と語っていることは知っています。

イエス様は、「殺してはならない」という戒めについて教えてくださったことがあります。(マタイ5章)それによるなら、たとえ殺すことをしていなくても、相手のことを怒って、心の中で許さずにいたり、バカにしたりするなら、その人は相手のことを「殺した」のと同じ様に裁きを受けなければならないと、イエス様は教えてくださいました。罪に対する神様の規準は私たちが考えるよりもはるかに高いのです。このことを知っているクリスチャンは、自分が到底神様の基準に満たない罪人であることを承知しています。

ですから「罪を犯さないようになる」ということは不可能だと考え、初めから無理だと決めつけてしまいがちです。私自身にもその傾向があると思います。

私たちは自分が惨めな罪人であるということに慣れ過ぎてしまっているのかもしれません。弱い私を赦し、助け、憐れんでくださいと神様に祈ります。この祈り自体は間違ってはいません。自分の弱さを認め、神様の助けを祈ることは私たちに必要な祈りです。しかし、もしもそれだけで終わり、祈ったのだからあとは神さまに任せましょうとでも言わんばかりに、その後は何もしなくてもよいのでしょうか。

今回メッセージを準備しながら、ヨハネが「罪を犯さないようになるため」と書き記してくれていたことから、これは「神様が願っておられることなのだ」ということを教えられました。神様は私たちが罪を離れ、罪を犯さないようになることを願っておられます。私たちはもっと真剣に、その事実に向き合わなければならないと考えさせられました。

今は私たちは確かに欠けがある、完ぺきとは程遠い罪人です。神様は私たちが、今この時点で「罪を犯さない」完全な者でなければならないと言われているのではなく、「罪を犯さないようになる」ことを願ってくださっています。

そして、私たちにゆるしを道を用意していてくださいます。もう一度1節の初めから、続きもお読みしましょう。「1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」

神さまは私たちが弱い存在であることをよくご存じであり、私たちが赦しを必要とする存在であることを、私たち以上によく知っておられます。そして、イエス・キリストによる赦しの道を、実際に私たちに与えてくださいました。

聖書は、神様は、私たちへの愛のゆえに、御子イエス・キリストを、この世に送られたと教えています。

十字架で死なれたイエス・キリストは、私たちのすべての罪を背負い、私たちの身代わりに神様の怒りをすべてその身に受けられました。それ故に、御子イエス・キリストを信じる者に、罪の赦しがあたえられました。

今は未熟なもの、欠けだらけのものであるかもしれませんが、神様はそんな私たちのことを愛していてくださっているのだということがここからも分かります。

神様は私たちに期待し望みをかけてくださっています。そして神様の御心は必ず実現します。聖書は、神を信じイエス・キリストの救いを受け入れる者には、やがて朽ちることのない栄光の身体が与えられると約束しています。それが実現するとき、罪を犯さなくなるようにと願ってくださっている神様の御心が、私たちの上にも実現します。

**神の命令を守る**

さて、「罪を犯さないようになる」ということは、確かに神様が望んでおられことではありますが、さらに神様が喜んでくださる積極的な生き方について見ていきたいと思います。それは「神の命令を守る」という生き方です。

3節をお読みします。「3 もし私たちが神の命令を守っているなら、それによって、自分が神を知っていることが分かります。」

罪を犯したかどうか、神の命令を守ったかどうか。結果だけを見るなら、どちらも同じことだと言えるかもしれません。ヨハネ自身も、恐らくここでは同じ意味のことを言い換えただけのように思います。

しかし、「神の命令」を守るというのは、より積極的な姿勢があるように思います。ヨハネはこの後の3-5節で神の命令を守ることと、神を知っているということとを結びあわせています。3と4節をお読みします。「3 もし私たちが神の命令を守っているなら、それによって、自分が神を知っていることが分かる。4 神を知っていると言いながら、その命令を守っていない人は、偽り者であり、その人のうちに真理はありません。」とこのように述べました。そして更に、この手紙の後半では、神を愛することとも結びつけています。５：３です。「神の命令を守ること、それが、神を愛することです。」つまり、神の命令を守るということを、ヨハネは、神を知るとか、神を愛するというように、神様との関係性の中で考えています。

神の命令を守ることは、神様の御言葉をよく聞くことから始まります。そして、神様を愛するがゆえに、その言葉に従うことができるのです。愛という神様との関係性が、命令を守る動機となっていく時に、実は、弱く欠けだらけの罪人である私たちが、神様との交わりの中で生かされながら、「罪を犯さないようになってゆく」ということではないでしょうか。

罪を犯さないようにといくら頑張っても、そこにあるのは敗北と自分に対する失望や、自己嫌悪しかないでしょう。私たちは決して自分の力では、罪を克服することはできないからです。

しかし私たちには、罪の勝利されたお方がおられます。死を克服して甦られたキリストが、私たちとともにいていてくださいます。そしてこの方を愛し、神様を愛していく時に、私たちは知らず知らずのうちに「罪を犯さなくなって」いくことができます。「罪を犯さないようになる」のは、神を愛することにおいてはじめて可能なのです。神を愛して歩み始め、その御言葉を守ろうとしていくなら、私たちの霊がキリストの愛で満たされ、神様の愛が私たちに注がれるからです。

イエス様がその働きを始められたときに言われたのは、「悔い改めなさい。天の御国近づいたから」（マタイ４：１７）という言葉でした。「悔い改めなさい」とは私のもとに帰ってきなさいと言うことでです。神様は罪の中に歩んでいる人にいつも「悔い改めるように」と命じておられます。

神を愛し、その言葉を守る者は、神が愛と憐れみと赦しの神であることを知るでしょう。

欠けだらけで不完全な私たちは、神を愛するということにおいても、何度も失敗し、間違えてしまうことでしょう。でも悔い改めて主のもとに立ち返るなら、その度に主は赦してくださいます。

もうお前は神の愛を受ける資格はないと悪魔がささやくとき、主は私のもとにとどまりなさいと言われます。神を愛し、神のことばを守る歩みは、神様の愛の中を歩む恵みの道です。

「5　しかし、だれでも神のことばを守っているなら、その人のうちには神の愛が確かに全うされているのです。それによって、自分が神のうちにいることが分かります。」

お祈りしましょう。